低家賃の民間借上げアパートを提供する事業も始まった。

こうした「路上対策」は社会統合の主要なメルクマール（指標）であると同時に、事業の内部に排除の契機を包んでいる。つまり、自立支援事業において一度就労自立に失敗した人は、二度と利用できない制度となっている、施設に入るまでテントをたたむよう公園管理職員から執拗な「説得」を受ける、路上に戻ったときには公園にテントを張ることができなくなっている、などである。これをもって「対策なき排除」から「対策ある排除」へ移行したという人たちもいる。実際、昨冬には自立支援事業施設への入所「説得」に従わない白川公園の当事者たちを、名古屋市は強制排除した。

社会統合は進む。選別と排除を伴いながら進む。そのプロセスはホームレス問題の運動体自身が推し進めてきたものでもある。しかし、活用できる社会資源が増えていったとしても、当事者たちがそれを踏み台（プラットフォーム）として活用できる条件と環境が整わなければ、人びとはただそれに乗せられて、流されていくこととなってしまう。

たとえば宿所の提供それ自体は一般的に歓迎すべきものではあるが、公園に暮らす人たちが公園管理者からの執拗な「説得」によって、もはや入居以外の選択肢はないと観念し、さまざまな不満と将来への不安を押し殺して申込書にサインするのだとしたら、彼ら彼女らはその施策を「活用する」といえるのだろうか？　活用することと流されること、それは正反対の行為のはずなのだが、実際のところ、両者の区別は当人を含めてきわめて難しい……。

問題は「ホームレス」なのか「私たちの社会」なのか

したがって重要なことは、単にアクセスできる社会資源が増え、社会統合が進むだけでなく、そのプロセスが同時に社会的な変容を伴っているかどうか、という点にあるように思われる。社会統合が進行し、それに伴い社会資源が増大していくこと、ホームレス問題に関心を持つ人たちが増えていくこと、それ自体は〈再生〉の問題と独立した変数である。

社会構造的に見た場合、ホームレス問題の顕在化とは日本の雇用形態一般の不安定化を示す一つの現象である。かつては建設現場の日雇労働者を吸収する町としての「寄せ場」があり、機能していた。東京の山谷、大阪の釜ヶ崎などである。しかし求人が減り「寄せ場」では食べていけなくなった人たちが新宿や渋谷など、「寄せ場」以外の繁華街に姿を現し始める。これが「ホームレス」と呼ばれた。

求人が減ったのは、企業の側が「寄せ場」に行かなくても、日雇的な労働力を調達できるようになったからである。「寄せ場」に行かなくても、人材派遣会社を通じて、携帯電話一本を頼りに、安く働く若い労働者がゴマンと集まってくる。「寄せ場」の日雇のような不安定な就労形態が日本社会全般に浸透し一般化し始めたときに、ホームレスもまた「寄せ場」を出て、全国津々浦々の町に姿を現した。

したがってホームレスとは特殊な人たちではなく、不安定な私やあなたの雇用形態、生活状況を推し進めた果てに見える一つの姿である。そのことが一〇年をかけて、少しずつ少しずつ、本当に少しずつではあるが、認知されるようになってきた。

そのとき問題とされるべきなのは、私の考えでは「ホームレス状態が特殊でなくなるほどに不安定な状態が一般化したこの社会」となるのだが、当事者の考え方も、ホームレス問題に関心を寄せ始めた人たちの考え方も、必ずしもそうはなっていないような印象を受ける。むしろ最近よく耳にするのは、「こんな時代でも生きていけるように、技能を身につけ、資格を得て、人びとに認められるようにがんばりましょう」というメッセージである。そのとき社会は、こちらが身を寄り添わせる相手であって、変わるべき課題を孕（はら）んだ相手ではない。

かつてホームレス問題に関心を持つ人といえば、クリスチャンか学生運動上がりの「活動家」くらいのものだった。それがいまでは、さまざまな年齢や職種の人たちが関心を持ち、民間支援団体を訪れるようになってきてい

「自分たちで食べる米は自分たちで作る」

愛知県一色町の恵農場で
（写真提供：フードバンク）

といって始めたお米作りは、今年で3年目を迎える。

きっかけは、かつて路上にいて農業研修に出向いたTさんの発案だった。調子のすぐれない彼の農場では3年目のお米作りはかなわなかったけれども、「苦労して寄付を集めるくらいだったら、自分たちで作っちまえばいいじゃないか」という彼のアイディアは私たちに大きなインパクトをもたらした。誰も好きで炊き出しに頼っているわけではない。要は、当事者たちのさまざまで、雑多で、時に突拍子もないアイディアにつきあえる発想と条件整備の力を私たち社会の側が持っているかどうかなのではないだろうか？

文：湯浅誠（P.22、P.23の囲みも）